

第 1915 回 定例研究会報告要旨（2月25日）

2010 年の食生活・専門家調査から

（食生活情報サービスセンター）谷野 陽

（調査の趣旨）

食料需要予測は「趨勢値」や所得弾性値を基本とし、所要の補正を加える方法が用いられてきた。しかしながら、低成長と飽食の時代に入り食生活の変化は連続的、安定的といえないようになり、所得弾性値も 1990 年代に入って多くの品目で絶対値がゼロに近い数値となるなど、従来の手法の基礎となっていた条件が変化してきている。

今回の調査では、今後は各年齢階層についての人口と消費量の積を合計したもので食料需要予測を行うことを念頭において、専門家調査により 2010 年の食生活の予測を試みた。

（調査の方法）

調査は同じ対象者に対して、第 1 回は食材、料理の形式、食事の回数、一緒に食べる人、外部への機能依存のほか、食生活を総体として見たイメージを自由記載方式で回答し、第 2 回は各世代共通の 7 区分、34 の質問と団塊 3 世、食品産業の対応について、実現の可能性を 5 段階の評価で回答する方式をとった。回答数は第 1 回 34、第 2 回 30 である。

予測する世代は 昭和一桁生まれ、 団塊の世代、 団塊 2 世、 団塊 3 世である。昭和一桁生まれは夫婦と配偶者の死亡などで单身と成った場合に分けて回答を求めた質問もある。回答の結果は 5 段階の評価に第 3 段階をゼロとする正負のスコアを与えて平均値を計算するとともに、分布についても評価した。

（調査結果の概要）

すべての世代で食事作りは妻、母の仕事であるが、「ほとんど手作り」がプラスとなるのは昭和一桁の夫婦だけで、他のグループは加工食品、中食、外食への依存が高いと予測されている。とくに団塊 2 世については調理済食品、外食など外部化項目が高いプラスのスコアを示している。料理の内容は団塊世

代までは肉より魚がプラス、団塊 2 世では魚より肉がプラスのスコアとなり、この間ではっきりした違いがある。これは調味での洋風、和風についても同様である。主食はすべての世代で夕食は米飯がプラスとなるが、団塊 3 世になるとその数値は大幅に低くなる。朝食、昼食に米飯を食べるのは昭和一桁生まれだけがプラスとなった。団塊 3 世では主食、副食の概念が希薄になり、井や一皿ものが増加すると予測されている。食品の選択では、「価格に敏感」は団塊 2 世、「産地・品質へのこだわり」は団塊の世代、「健康志向」は昭和一桁で高いプラスのスコアとなっている。買い物行動では団塊 2 世ではコンビニやデパ地下のスコアが高く、「毎日近所で買い物」は顕著なマイナスとなった。昭和一桁ではデパ地下、配送利用がマイナスで、「毎日近所で買い物」はプラスだが低い値にとどまっている。

団塊 3 世の食生活は、一人で食えることが多く、おにぎりなど箸を使わない料理やファストフード、インスタントフードを好み、外食や加工食品の銘柄に詳しいと予測されている。食品産業では、高齢者、副食用のハーフサイズの商品が増え、中食では家庭の夕食向けが増加すると予測されているが、スーパーの生鮮売り場が大幅に縮小し調理食品中心となるかどうかについては意見が分かれた。

（小括）

この調査結果は人口構成などを考慮すると、2010 年の食料需要が団塊 2 世以降の食生活の変化によって大きな影響を受ける可能性が示唆している。米は 2010 年においても主食の地位を維持すると考えられるが消費の形態や数量は従来連続線上でない変化が生ずる可能性がある。食生活の外部化は素材である農水産物の商品特性や価格、産地に大きな影響を与えるだろう。経済の低成長による所得の停滞のもとでは価格弾性値が重要な要素となることも考えられる。本調査は時間と資金的制約から回答数も少なく検討グループの規模も限定されたパイロット的性格のものであり、今後本格的な調査検討を期待したい。